

Ⅲ. 特別報告

英国におけるスポーツ史研究のこれまでをふりかえって

埼玉大学教授 市橋秀夫

尾崎正峰(司会)：私たちスポーツ科学研究室は、ゆるやかな共同研究体制をとっており、構成メンバースタッフがそれぞれの個別研究を発表する定例研究会を行っています。その研究会の一貫として「ゲスト研究会」と名付けた、自分たちの領域にサジェスションいただける方をお招きして報告をしていただくという会をこれまでずっと開催してきました。

今日は、埼玉大学の市橋先生をお招きしてお話をいただきます。私たちのスタッフの坂上先生と市橋先生は留学先で一緒だったというご縁もありますが、題名やレジュメの中身をみますと、私たちスポーツ研究者にさまざまな刺激を与えていただけるのではないかと期待しております。

「レジャー史」は成り立つのか？

市橋秀夫：市橋といいます。よろしくお願ひします。研究休暇をもらって2009年の10月から2010年の8月までイギリスに行かせていただきました。イングランドのド・モントフォート大学に社会史研究センターがありまして、そこに客員研究員として所属させていただきました。今日は、その時の経験をふまえてお話しさせていただきます。

僕自身はスポーツ史の専門家ではないんです。イギリスの近現代社会史に関心があるのですが、博士論文では、第二次大戦後のいわゆる「豊かな労働者」階級のレジャーが博士論文の研究対象でした。スポーツはその時から取り上げてはいたんですけれども、いろいろなレジャーの1つとして取り上げていまして、スポーツを専門にやったこ

とはないんです。でも指導教員がトニー・メイソン先生だったこともあって、フットボール（サッカー）がイギリス社会の中で大事だなということは頭の中にありました。そこで1年間研究休暇をもらったので、自分があまり理解していないことを学びに行こうと思い、ド・モントフォート大学でスポーツ史を学生のように勉強するということを見せてもらってきたわけです。ですので、そのレベルで考えたことを今回はお話させていただくこととなります——今日おいでになっている早稲田大学の石井昌幸先生とちょうど研究期間が重なって、ド・モントフォート大学で一緒させていただきました。ですので、僕はいろんな意味で心強かったし、さまざまにお話しと勉強をさせていただきました。報告で間違っているところは石井先生に訂正していただくということでお願いしたいと思います。

僕はレジャー史研究ということで始めたんですが、レジャー史という研究領域がそれ自身で成り立つのか成り立たないのかということはずっと気になっているんです。博士論文もなんとか書いたのですが、結局「レジャーとは何か」ということはよくわからないままでした。歴史研究のテーマとしてどう扱ったら一番良いのかわからないまま抱えてきているところがあります。今も、レジャーそのものではなくて、1960年代論とか、そこから派生したテーマとして、同性愛犯罪法からみた社会規範の変容研究などをやっているんですけれども、基本的には社会史——イギリスの社会、イングランドの社会がどういう風に20世紀のうちに変わって、あるいは変わらなかったのか、とい

うことに関心があるんですね。それをレジャーという切り口でどういう風にできるのかなということが、自分としてはずっと課題としてあります。

そのことは、ここ 30 年間のイギリスのスポーツ史の研究者の抱えている課題や問題をもとと、結構似たところがあると思います。レジャーの歴史、カルチャーの歴史、スポーツの歴史といった場合、個別の歴史はあるんですね。フットボールの歴史や、テニスの歴史、あるいはポピュラー・ミュージックの歴史とかですね。それはそれとして成立するんですけども、僕はそれがやりたいわけではないんですね。先ほどもお話ししたとおり、イギリス社会の特質とか、その変化が何故起こったのかとか、何が変わらないのか。変わらないんだったら何故それは変わらないのか、そういうことを考えたいと思っています。そういう場合、いままである政治史とか経済史ではなくて、もう少し文化史的にするにはどういう風にすればいいのかということで、レジャーやスポーツをそこに位置付けるのであれば位置付けたいと思っているわけです。ですから社会全体との関連を問えるようなレジャー史ならレジャー史、スポーツ史ならスポーツ史、文化史なら文化史はどういう風に可能なのかということをも時々考えるんですね。実際には、史料があるもので研究しているわけですが、理論的な問題としてはそういったところを感じているわけです。

「レジャー史」「スポーツ史研究」の登場

所属させてもらっていたド・モントフォート大学の「スポーツの歴史と文化国際研究所」という大学院研究センターですが、教員はみな学部の授業も持っています。スポーツ史のことがよくわかっていなかったのが、学部の授業に出させてもらいました。本当は行くのが 10 月最初の予定だったのですが、家族のビザがうまく取れず 10 月後半になってしまって、途中からの参加でした。今日は授業のシラバスと資料集を持ってきましたの

でどうぞご覧ください。

滞英中、日本人のあるスポーツ史研究者の方から、イギリス・スポーツ史研究の 30 年を紹介した論文の抜き刷りをいただいたんですね。それがなかなか“衝撃的”な論文で、そのこともあってスポーツ史はどんなものなのかな、と考えるつもりだったわけです。詳しい内容は省きますが、その論文でいろいろ引用されている文献の読解というか、翻訳も含めて解釈の仕方に疑問を持ったのですが、そこで論じられているスポーツ史研究の流れや現状理解についても強い違和感を覚えました。

僕が見ている限り、イギリスのスポーツ史、レジャー史というのは 1950 年代くらいからアカデミックなものとして、ちらちら出てくる。当時、労働史学会あたりが中心に研究集会を催したり、*Past and Present* という有名な伝統ある歴史研究の雑誌を出している学会が 1960 年代はじめに余暇についての研究集会をやっていたりするんですね。そのあたりが、わりとまとまった動きが始まる最初だと思います。なぜ労働史学会なんだろうということですけども、基本的には、元々は労働組合史、労働者の生活みたいのところから始まって、しばらくすると、フットボールとか、炭鉱の地域ですと犬を飼っていたり、鳩を飛ばしたりとか、いろんなブラッド・スポーツに近いようなものも含めて、近現代にいろんなことを労働者は趣味としてやっていて、それは結構重要だという認識がだんだん出てきていた。労働者階級の生産現場の研究ではなくて、スペアタイム、そちらの方も見ていかなくてはならないということが労働史学会に少しずつ出ていたわけです。

それから、60 年代は歴史だけではなくて、人類学とか他の分野でも文化が大きな課題になりつつあった時期なんじゃないかなと思うんですね。20 世紀後半の文化史的な文脈でいうとポストモダンの流れが 1960 年代以降出てきたと言われていますが、文化的解釈への注目という展開があらゆる学問分野で起こっていて、それもレジャー史、スポ

一ツ史研究の後押しになったと僕は思っているんですね。カルチュラル・スタディーズが出てきてそういう流れが進んだという人がいるんですが、カルチュラル・スタディーズもそういう全体の動きの1つであって、カルチュラル・スタディーズがあって文化研究が進んだわけでは全然ないというのが僕の見ているところですね。

もうひとつ、レジャー史・スポーツ史の出発点としてよくいわれているのが E・P・トムスンですね。1980 年に出た有名なヒュー・カニンガムの産業革命期のレジャーの研究があって、彼はその一番の結論の部分で、自分がどうして研究するようになったか、今、理論的に自分はどういうところにたどり着いたか、ということを書いているんですけども、そこで自分たちの世代には E・P・トムスンの影響が大きく、E・P・トムスンから 3 つのことを学んだということを書いています。

ひとつは、主体性というか歴史は人間がつくるんだということ。もうひとつは、過去の生きられた経験が重要で、社会全体、個々人にとってもその重要性は同じだということ。それから、もう1つは、人間の人生の側面、レジャーやスポーツ、生産や家族でもいいんですが、そういう側面は他の側面と切り離せない、単独では扱えないということ。カニンガムはそうしたことにインスピレーションを受けたと言っているんですね。

最後のことはスポーツ史にもかかわることで、スポーツ史はスポーツ史としてだけでは成り立たないのではないかとということをみなさんに伺ってみたい。レジャー史もそうですけれども、独立した研究領域としていくら展開しても、それは装いを替えた古い意味での一風俗史研究であって、60 年代以降に提案されてきたような新しい社会史研究にはならないのではないかと思うわけです。

トムスンの著作は 1963 年に出たものなので、いろいろ欠点があるのは当たり前といえば当たり前なんですが、瑣末な批判が多くて、研究自体はトムスンの問題提起に答えたものはあまり残って

いないのではないかと、カニンガムが 80 年代の本のあとがきに書いているんですね。結局、社会史もそうですけれども、主体を真正面からきちんと扱ったものは少ない。トムスは、労働者階級は自らの活動によって形成されてきたということがあるんだというんですけども、結局、今主流の歴史研究というのは、階級というのは社会構造の中から生み出されたものであるというものだと思うんですね。やはり、こういう経済状況があって出てきたんだという説明をしたほうが説明がしやすい。やはり構造主義的な理解なんですね。

それからもうひとつカニンガムが批判しているのは、文化を見るときの見方。伝統文化と近代文化を分けて、伝統文化は衰退して、近代文化が新しく作られるという見方がやはり多い。でもカニンガムに言わせると、そうではなくて、古いものが変化していく側面、つまり、古いものは段々死に絶えて新しいものが新しい社会構造の中で出てくるとかではなくて、古いものは新しい社会構造とぶつかる中でそれ自身が変わって行って生成変転しているという見方をしないといけないんじゃないかという見方。

カニンガムは、やや唐突に、著書の最後のところで、理論的にいうとヘゲモニー論がいいかなと書いています。主体を重視する、主体の役割をある程度反映できる理論というと、ヘゲモニー論になるということなんですね。構造をまったく無視するのではなくて、しかも、その主体のあり方を評価できるような歴史研究に見合う理論、使える理論というのはヘゲモニー論じゃないかといっているわけです。

カニンガムの著書では、産業革命で急に昔のスポーツや文化がなくなるのではなくて、形を少し変えながらも生き残っていくというんです。しかし、もう少し先の 19 世紀末、20 世紀のはじめになると、やっぱり商業文化にまったく吸い取られてしまったという理解をカニンガムはしているように感じました。そのあたりでは近代化論みたいになっている感じが強い気がします。

僕は、ヘゲモニー論も個別の研究をするのにはいいと思うんですが、スポーツ全体のヘゲモニーとかそういうものとしてはあんまり役に立たないのでは？という感じをもっているんですね。スポーツといっても、もちろん地域でもずいぶん違いますし、それぞれがまったく違う形でヘゲモニーを発揮する場合もあるわけです。個別の限定された状況でヘゲモニー論を援用することができても、スポーツ全体をひとくくりにして近代社会の中での役割を論じるということははたしてできるのか。大雑把な議論はできても、あまり確かなことはいえないのではないかなと思っています。

前置きが長くなりましたが、僕は、スポーツ史はスポーツ史としては成り立たないのではないかと考えているわけです。それはつまり、スポーツ史はどういう形でメインストリームの歴史学と連関できるのかという問いかけになります。そのことをこのあとの中心のテーマにしてお話させていただきたいと思います。

スポーツ史とウォーリック大学社会史研究所

ここ 30 年間で、スポーツ史研究はたいへんな蓄積があるということは、向こうにいてよくわかったんですね。学術専門誌は 3 種類から 4 種類あって、毎月のように出されていて、世界中の若い研究者のものが活字になって発表され、学会を開けば大勢の人が集まってくる。それは 30 年前にはなかったことですね。

ところで、近現代イギリスの政治変容や、階級政治の歴史研究者であるロス・マッキビンが書いた「何故イギリスにマルクス主義がないのか」という有名な論文があるのですが、その中で、彼は、イギリスにマルクス主義が根付かないのは、ひとつに、労働者階級のカルチャーとか、労働組合もっているカルチャーとか、そういう態度が政治にも重要な役割を果たしているということがあるというんですね。彼は、そこからスポーツとかにも触れていくことになるんですが、イギリスのそ

れは、ドイツとかの大衆スポーツがすごく政治化していくこととは随分違う側面をもっていることを言っている。マッキビンは階級文化史研究の第一人者でもあって、スポーツ史家からはきわめて重要な研究者だと見られています。『スポーツ・アンド・ブリティッシュ』を書いたリチャード・ホルトというイギリス・スポーツ史研究の第一人者がいますが、その著作の 20 周年記念集会が開かれています。マッキビンがやっぱりきて何か話をしたようです。

マッキビンが短い書評の中で触れているものを捕捉しながら話したいと思うんですけども、スポーツ史は、社会の何かを反映するものとしてのスポーツを扱うという形で発展してきたのではないかということをマッキビンは言っています。つまり、階級とか社会序列だったり、ナショナリズムの反映だったり、国家の態度をみたり、地域主義、合理的娯楽、ソーシャルコントロール、消費主義、ジェンダーというものがスポーツのなかに反映しているという、そういうものとして概ねスポーツ史は展開してきたんじゃないかと言っています。

研究制度面ではすごく成果があって、ド・モンフォートにはセンターが存在しているし、スポーツ社会学やスポーツの歴史社会学みたいな研究センター、小さいかもしれないけれども、いくつもあるような、そんな時代に入っているんですね。ただ、制度面でも両義的なところがあって、今でも歴史研究ではスポーツ史というと、カリキュラムの中でスポーツ史を教えているところはなくて、教えているのはスポーツ史に特化しているところだけです。一般の歴史学部でスポーツを独立したテーマとして取り上げて扱っているところはほぼないといっていいんじゃないでしょうか。一コマだけスポーツをとりあげるというのはあったりするかもしれないけれども。

E・P・トムソンは、ウォーリック大学の社会史研究所を 2 年ですぐ辞めちゃうんですね。大学生活が肌に合わないみたいで。それから、ウォーリック大学は毎年研究者を呼んで、英米比較労働史

という大学院の MA コースをもっていたんですけども、ちょうど学生紛争の時、そのコースのためにアメリカから招聘していた左翼の歴史研究者のことを、大学側がスパイして、集会で何を発言しているのかなど記録していたんです。学生が大学を占拠して書類を引っ張り出してきたらそのことがわかって、それに抗議するというのもあってトムソンは辞めたみたいですね。

トムソンのお弟子さんたちの中で、マーカムソンもそうですが、スポーツ史研究者は出てくるんですが、ウォーリック自体にスポーツ史が根付いたかというのと、根付かなかった。制度的に認められなかった点があって、ウォーリック大学は、E・P・トムソンが辞めた後は、ロイドン・ハリソンという偉い労働史研究者が所長に就きます。そのもとでトニー・メイソン先生が MA のコースの責任をもってやってくんですけども、そのときに 5 ヶ年研究計画みたいのを作っています。その計画にスポーツ史研究も入っていたんですけど、最終的にはメイソン先生はウォーリックの社会史研究所の重要な役には就かせてもらえなかったんです。コース・ディレクターなどもやり、所長みたいになった時期もあるんですけど、一番トップの役職は任せてもらえなかった。そういう不満もあって、メイソン先生自身は教授としてド・モンテフォートに移るということがあったと思います。それはどういうことかというのと、ウォーリックのようなメインストリームの歴史学研究がそれなりに確立しているところでは、スポーツ史の人をトップに立たせてということにはなかなかならない。スポーツ史の人では歴史学の顔にならないというか、そういう見方があるんじゃないかなと感じがします。僕が今見た感じは、スポーツ史に特化している大学というのは、一橋大学のような名前のある大学よりは、ド・モンテフォートのような、かつてのポリテクニクで 90 年代サッチャー政権のもとで大学に格上げされたところが精力的にやっている。逆に言うと既存の大学はなかなか硬いというか、そこを取り入れるような風になって

いてないというのがあるという感じがしました。

スポーツ史の認知度

次に、イギリス史の概説書でスポーツについてどれだけ扱っているかということについてお話ししたいのですが、リチャード・ホルト先生は去年の 12 月でド・モンテフォートのセンターの所長をおやめになって、今はトニー・コリンズという人が後任の所長となり、新しい体制で始まっているんですね。所長はやっぱり大変なんですよ。お金を集めたり、中間管理職のような立場もあるので、スタッフにも論文を書くように言うとか、シンポジウムを年に何回もやらなきゃいけない、というように。ものすごく精力的な人ですごく親切な方なんですけれども、そういう行政の大変さみたいなのはすごくあったみたいなんです。それに授業も持たれている。執筆時間をもう少し確保したいということもあってお辞めになったようです。

後任のトニー・コリンズが書評論文みたいな、ちょっと長めなものを書いているんですけど、彼もやっぱりスポーツ史研究は歴史研究の中では認められていないところがあると言っていて、例えば <Oxford History of British Empire> という評価の高いイギリス帝国史研究のシリーズがあるんですけど、そこではスポーツへの言及がまったく出てこないと書いています。それから、例えば、セクシャリティやマスキュリニティの歴史というのは、今すごく出てくるようになっていますが、スポーツはマスキュリニティというテーマにはすごく格好の素材なのに、そうした歴史家たちがスポーツを通してマスキュリニティを検討するのはまだほとんどないというようなことも言っています。つまり、スポーツを通してマスキュリニティを見ているのはスポーツ史家で、そうでないマスキュリニティを中心にやっている人たちは、軍隊の話とかでやっていて、スポーツを取り上げてやってみようという視点はあまりないということ

なんですね。

これは僕の専門と関わるのですが、戦後の若者文化研究はすごくたくさんありますし、歴史でも60年代以降のものが随分出るようになっていっていますが、そこでもスポーツを取り上げたものはないんですね。若者文化というと、もっぱら音楽、ファッションばかりで、スポーツは全然出てこないように思います。また、1960年代をテーマにする本はいくつも出ているんですが、スポーツは取り上げられていない。1960年代のイギリス文化について概説書みたいなものを書かせていただく機会が数年前にあったのですが、スポーツをどういう風に位置づけるかということについて、自分の反省としても思うんです。60年代は、イギリスではクリケットのアマチュア規定が撤廃されたり、フットボールでいうと最高賃金制が撤廃されたりする時期です。何故それが1960年代に撤廃されたのかというのはすごく面白い研究テーマだと思うんですが、そういう研究は幅広い社会史の中では全然取り上げられていないんですね。60年代が終わるころにフリーガンの話が出てくるんですけども。ジェイムズ・ウォルヴィンなんかはフリーガニズムの研究をその当時にしていますが、それもスポーツ史というかフットボール史のようなジャンルに入れられてしまっていて、幅広い概説書の60年代70年代を取り上げている本の中でスポーツをきちんと取り上げるといえることにはなっていないんですね。パッシング・レファレンスみたいなものはあるんですね。時々ぱっと触れたりするのはあるんですけど、きちんと取り上げて論じたりしたものはないですね。

それでも、スポーツを扱っているイギリス近現代史の概説的テキストというのも出てきているには出てきています。配布資料の最初にあるものは、イギリスの通史のシリーズ< Blackwell Companions to British History >で、ある時代のイギリス社会を、テーマごとに、わりと短めのページ数で論じていて、よくまとまっていて授業で学生たちに報告させるのに手ごろなものです。今

日はそのシリーズのなかの19世紀、20世紀初期、戦後の巻の目次を持ってきました。19世紀のところを見てもらうと、パート1というのが、「ブリテン・アンド・ワールド」という世界の中のイギリスの経済の問題とか軍の問題とかがあって、その後、パート2が「政治と政府」、パート3に「経済と社会」、パート4が「社会と文化」となっていて、24章が「ポピュラー・レジャー・アンド・スポーツ」となっています。このシリーズでは、必ずレジャーとかスポーツというのが入っているんですね。以前はレジャーがたまにあったかなという程度でしたが、スポーツとタイトルに出てくるようになるのがここ最近の傾向だと思うんですね。20世紀初期ということで第二次大戦前までを扱った巻だと、28章が「レジャー・アンド・スポーツ・イン・ブリテン」となっています。そして、戦後の巻はリチャード・ホルト先生がスポーツのことを書かれているんですね。

また、マーティン・ドントンという人、一橋の経済研究所には何度か来て講演をされていると思うんですが、今イギリスの歴史学会の会長です。まだ50代で若いんですが、通史を分厚い本で書いていたり、あるいはケンブリッジの都市史、アーバン・ヒストリーの三巻本の中で近代の中の部分を担当したりしています。彼は、文化とかスポーツのこともすごく面白い人ですけれども、『富と福祉—1851年から1951年のイギリス社会経済史』というタイトルの通史本は、パート1が「イギリス経済の解剖」、パート2が「グローバル化と脱グローバル化」、そして、パート3が「貧困と繁栄と国民」という構成です。この「貧困と繁栄と国民」というパート3の13章に「文化と消費」という項目があって、消費の問題としてスポーツにそれなりの量を割いて触れています。

それからドントンが編集したケンブリッジの都市史第3巻のなかでも23章が「遊ぶことと祈ること」となっていて、ダグラス・リードが書いています。遊ぶこと(Playing)と祈ること(Praying)という、宗教の問題とレジャーを扱

った章です。スポーツもここに入っていて、ちょうど 19 世紀から 20 世紀にかけての巻で、宗教の衰退とともにレジャーが取ってかわるといふ、ある意味わかりやすいといふか、ステレオタイプな構図ですけれども。

それから、もうひとつの例ですが、『20 世紀のイギリス—20 世紀イギリス史の経済、文化、社会変化』という学部生向けのテキストがあります。その第 1 版ではトニー・メイソンがレジャーとスポーツのことを書いていたんですけども、第 2 版では少し書いている人たちが若返って、テーマも少し新しいものが入ってきました。戦前の部分パート 2 の 1954 年までといふ 13 章のところレジャーといふのが入っていて、スポーツはここでちょっと扱われているだけなんです。戦後の部分にはぜんぜん入っていない。

概説書の中では、こんな扱いなんです。かなりしっかり扱われているものもあれば、最後のもののようにまだまだ 20 世紀後半でも取り上げていないということもあるわけです。

だから絵柄は、ミックスド・ピクチャーといふか、ずいぶん蓄積ができた部分と、まだなかなかメインストリーム化されていない部分がある。あるいは、評価されている部分もあるけれども、されてない部分もまだ残っているという状況のように思います。

それから余談ですが、ロス・マッキンがスポーツ史について「6 人のパイオニア」をあげています。体育史のピーター・マッキントッシュ、帝国の問題なんかをやっているマンガン、フットボールのトニー・メイソンと、スポーツ全般、ゴルフなどだとリチャード・ホルト先生ですね。それからオーストラリア史も書いているド・モントフォートの最初の所長のヴァンプルー、それから、スポーツ地理学のジョン・ベイル。この人たちをパイオニアだとあげています。

スポーツ史への悲観論

最初にお話しした日本人研究者のサーヴェイ論文ですごく違和感をもったのは、すごくハッピーなんですね。スポーツ史の過去 30 年間はすごく広がってきて、研究がいろいろあって、言語論的な展開もあって、女性史もでてきて、こう、ゴー！ゴー！ゴー！って感じなんです。それで、その論文の中で言及されている論文を僕も読んでみたんですけども、かなり違うんです。

たとえば、マイク・ハギンズなんかはすごいペスマスティックなんですね。これは 2000 年くらいの論文だったと思うんですけども、スポーツ史はこんなことでもうだめなんじゃないかといふ、強い危機感を露わにした書評論文があります。また、トニー・コリンズは「スポーツ史のゲッター化」みたいなことを言っていて、やはりスポーツ史それ自身に閉じこもっているようなものが非常に多い、専門誌は出てきているけれども広がりがないと厳しい見方をしています。僕がちょっと聞いた話だと、トニー・コリンズはド・モントフォートのスタッフとして一時在籍していたようですけれども、自分はスポーツ史だけやりたいんじゃないといふ途中で出ていっちゃったみたいなんですね。でも今度、リチャード・ホルト先生が、トニー・コリンズはやはりすばらしい、すばらしいスポーツ史の論文を書かれているということで、ホルト先生が説得してトニー・コリンズを呼び戻したということだったようです。スポーツ史は、それ自身の研究なのか、もっと幅広い歴史の問題に示唆をくれるような研究なのか、みたいな問題意識。この 2 つは、結局、別に対立するものではなくて、当然両立させていくべきものなわけですけれども、それでもやっぱりこういう問いを立てざるを得ないという感じをトニー・コリンズはどうも持っているようです。

ド・モントフォートにいて、大学院生をみていて思ったんですけども、やっぱりスポーツ好きな人が来ている。自分は、たとえばボクシングならボクシングをやっていたから、このことをやりたいみたいな感じ。その広がりやのなさが報告を聞いて

ているとわかるところがある。特定のスポーツの
ことについてはものすごく知っているけれども、
それが社会の中でどうなのか、みたいなことにな
ると、とたんに関心が薄れていく。トニー・コリ
ンズとかマイク・ハギンズとか、あるいはフット
ボール史のマシュー・テイラーみたいな先生たち
が、そういうことをちょっと何とかしなきゃいか
んと思っているような気がしました。

レジュメには、トニー・コリンズが言っている
ことをちょっと書いたんですが、スポーツ全般と
して一括りにして議論するのは意味がないんじ
ゃないかということも彼も言っています。ポロ競
技のハーリングム・クラブと、ハルというイング
ランド北部の労働者階級の町で行なわれているレ
スリングとの共通性をスポーツとくくってみても、
それは何も言ったことにならない。それぞれのス
ポーツが意味をなすコンテキストをきちんと設定
しないと、あまりスポーツ、スポーツと言ってい
ても仕方ないんじゃないか、ということだと思
うんですね。コリンズもマイク・ハギンズも、い
わゆる昔の労働史から出てきた社会史研究が投
げかけたような問いかけの仕方が今でも非常
に面白くて有益で、逆にポストモダンの問
いかけは宙に浮いたような話で、あんまりイ
ギリス社会について教えてくれないんじ
ゃないかという点は共通していると思
うんです。

マイク・ハギンズ、彼は競馬の社会史研究を
やっている人で、彼も新しい傾向に批判的な
人で、スポーツに対するトニー・コリンズ
などの批判は、だいたいのんびりしている
みたいなことまで言うんですね。社会史の
方は文化史の影響を受けて非常に厳しく
自分たちの問い直しを迫られています。
言語論やポストモダンとかですね。トム
スンも含めて、旧来の社会史の研究
方法はいろいろ批判を受けているん
です。それに対して、レジャー史
やスポーツ史は、あまり受けてい
なくて、みんなのんびりと昔の
方法でやっていると。今になっ
て、ヘゲモニーやソーシャル
コントロールとかいったもの
を使うようなものも出てきて
いるけれども、

社会史の方はその段階を過ぎて、次の段階に移
っているんだとマイク・ハギンズは書いていま
す。そこでハギンズが援用しているのは日本語
の翻訳本もあるピーター・バーグの文化史に
関する『文化史とは何か』で、ハイブリッド
・ジャンルとしての歴史学といった考え方
ですね。

結局、文化史も文化史だけでは成り立たない
ですね。言語とか、表象とか、それらをいろ
いろ含めてやっても、社会との接点をどう
するんだというときに、どうもそこに答
えられない。文化史の限界をピーター・
バーグなんかは言うようになっていて、
だから「社会史の逆襲」という小さな
章を設けているくらいです。まあピー
ター・バーグの結論は、言語論や表
象の分析とかは大事で、それから教
えてもらうこともあったけれども、
だからといって社会経済的な構造を
抜きにテキストばかりを読み込んで
も、これもやっぱり何もならない、
というもので、ちょっとUターンし
たところはあるように思います。ハ
ギンズはその意見に同意しているの
かなと思いました。

ピーター・ボーセイというイギリスの
都市史の研究者の人が、レジャーに
関して300年くらいの範囲、16
世紀から20世紀までを扱った概
説的な本を出しているんですけども、
ボーセイもこういう扱い方ですね。
言語論なんかも扱うけれども、
それだけじゃやっぱり足りないね、
という立場。

スポーツ・スタディーズ

あと、最近少し思ったのが、「スポーツ史」
ではなくて、「スポーツ・スタディーズ」
という言い方の研究コースみたいな
ものがイギリスででき始めていま
す。また、スポーツ・スタディーズ
というタイトルの小さい辞書も出
ましたが、これは名前からみてわ
かるようにカルチュラル・スタ
ディーズと対になっているような
ものなんですね。社会学系の人
たちは、スポーツ史でいえるこ
とは限りがあると思っている
みたいで、もっとスポーツの
多面的な側面を議論するには、
スポーツ史を含

む、「スポーツ・スタディーズ」というもっと大きいとらえ方のほうがやっぱりいろいろ扱えるというようなんですね。スポーツ史のド・モンフォートなんかも、スタディーズ系の人たちと一緒に共同研究をしたりしていて、社会学の人とももちろんいっしょにやったりしているんですけども、今後どうしていくのかな、という感じはありました。ここは皆さんどうお考えになっているのか知りたいのですけれども。

スポーツが問いかける社会史の課題

最後ですけれども、いくつかスポーツ史やレジャー史のテーマとして、今後、論じていったら面白いんじゃないかなというのをいくつかあげて、こういう形だったら少し広がりをもったスポーツ史なり、レジャー史なりが可能かなという風なものをあげておきました。

ひとつは時代区分の問題ですね。特に産業革命でイギリス社会はどう変わったかというのは、相変わらず議論としてあると思うんですね。経済史では産業革命はなかったという議論もあります。産業革命なんていう革命と呼ばれるものは起こってなくて、実は非常になだらかな変化であったというんですね。その影響もあって、社会史やレジャー史でも、連続説が主流になってきている。産業革命が進行するなかで伝統的なものがなくなって、バキュームができて、そのあと新しいものが生まれたというような、マーカムソンのような議論は、今、誰ももうしていないと思うんです。じゃあ、どういう風に変ったのかというと、これはカニングムのテーマでもあったんですけども、カニングムは、伝統的なものは最終的には商業的なものに変容してすっかり無くなってしまおうという風にみている、あるいは商業的なものによってかわられるというのかな、すっかり形が変わっていくという風にみていると思うんです。じゃあ、その変化はいつから見られるのか、というのは相変わらずテーマになると思うんです。

それからもうひとつは、これは今の現代社会の大きなテーマだと思うんですけども、歴史全体のテーマとしても大きなテーマで、イギリス・スポーツをみると国家の性質というか、国家の役割というのが改めて問われているという部分があると思うんです。サッチャー政権、それからブレア政権ですね。国家と民間と、その関係はどうあるべきか。社会全体としてどうあるべきかという福祉国家の問い直しというのが大きな問題としてあって、スポーツを通してみると、基本的にイギリスは、国家が国民社会への介入というのをあまりしなかったところだという見方が一般的だし、強いと思うんですね。でも、最近ではベッカーという人が、いやイギリスも実は結構、国家が介入しているんだ、スポーツにおいても特に 30 年代だとそのことはかなり明瞭だ、というんですね。

ポーセイも、面白い指摘をしています。イギリスは、国家のもうひとつ下にボランティア団体や、民間のスポーツ各種団体があるわけですね。そのことは地方自治体にもあてはまるわけですけども、そういうことからすると、イギリス国家自体はそれほど介入していないかもしれないけれども、民間の部分が、国家と連携しながら、実は人々の日常生活に大きな影響を及ぼしている。だから、単純に国家の介入が少なくて民間が主導でやっているといえないんじゃないか、という言い方をしていると思うんですね。つまり、イギリスの場合、民間と国家の間にもものすごく癒着があるというか、国家が民間にすごくまかせているという部分があるんですね。それで、そういう関係をどうみるかという問題になると思うんですね。この問題は、20 世紀のイギリス型福祉国家、今はその福祉国家の見直しという意味においてですね、それをスポーツを通してみるというのは、やっぱり面白いテーマだと思うんですね。

それから、これは古典的であり、今までも扱われてきているテーマだと思うんですが、アマチュアリズムの問題です。さっきお話ししたんですけども、1960 年代最初のころ、クリケットのアマ

チュア規定が撤廃されることになる。でも、それがなぜそのときに撤廃されたのかみたいな問題。あるいは、クリケットに言及することなしに近現代イングランドのスポーツについても社会についても何もいえないという面があるんじゃないかということです。特に1930年代くらいまでですね、政治との人的つながりも文字通り深いですし。

でも30年代以降は、クリケットは地位が落ちていくんですね。それには民主主義の台頭というか、大衆社会がより強力に台頭してくることと関係があるんじゃないかなということも面白いテーマだと思っているんです。ジャック・ウィリアムズという人が戦間期のクリケット社会史研究ですごく面白いことを書いていて、彼は、クリケットはイギリス社会をそのまますごく反映しているという。クリケットにおける階級的不平等、アマチュア、ジェントルマンの存在について、みんながそれらをそれとしていいね、お互い楽しもうねとかたちになっていたのは、社会そのものがそういうことを認めていることがあるからだ。彼は、そういうクリケットについて批判的な見方をしているんですけどもね。でも1930年代が終わっていくと、そういう形がやはり変わっていく。それはなぜ変わっていくのかというあたりですね。

それから、民主主義と消費主義の関係もすごく面白いとされていて、たとえば、トニー・メイソンとリチャード・ホルトの共著の『1945年以降のイギリス・スポーツ』の中で、1990年代に商業主義、テレビの放映権が入ってきて、かなり性格が大きく変わるという指摘がされています。フットボールなんかそうだと思うんです。1960年代にも変わりましたが、1990年代以前とは、お金の入り方がすごく違っている。しかし、拝金主義も生まれたが、それが、フットボール界をいっそう民主化したと言えることがあるかもしれないと思うんですね。だから、消費主義と民主主義とアマチュアリズムとの関係は、そのままイギリスの20世紀の社会史を議論するのに格好の課題ではないかなと思います。

あと、向こうの授業でマシュー・テイラーがすごく言っていたんですけども、アメリカのスポーツ史ではスポーツ史は都市史の一部として位置づけられていて、都市との関係できちんと議論されるようになってはいるけども、イギリスではそうっていない。それはもっとやられるべきだと何度か授業で学生たちに言っていた。そのことが印象に残っていて、僕自身はどういう風にこれをやるのかなというか、アメリカにはいくつか研究事例があるようなんですけども、ちょっとまだ勉強をしていなくてわからない部分があるんですけども、そのことはものすごく印象に残りました。

最後の配布資料はシラバスの一年間の授業の学部の学生向けの一覧表なんですね。その青い本の中から一部だけコピーしたものですけれども、こんな形でレジャーやスポーツ、スポーツとブリテン、そしてEUのことをすごく強調していて、イギリス史はヨーロッパとの比較という形で今後研究していこうという姿勢はずいぶんはっきりだされているなあ思いました。(報告終了)

質疑応答

坂上康博：ポストモダン的な問いかけよりは、「古典的」な問いかけが多くなったというご指摘ですが、具体的に社会史的な問いというのはどういうことを言っているのですか。

市橋：たとえば、コリンズが言っていることは、社会とか経済とかの変化との関係を問うのが「古典的」な社会史の問いかけで、ポストモダンの方は、テキストというか表象に現れた変化を追う、あるいは、その意味を問う、ということだと思うんですね。

僕が一つ思ったのは、戦後のフットボールの研究で、ド・モントフォートだとジェフリー・ヒル先生が、言語の研究というか、文学の中でスポーツがどのように描かれているのかということの研究することによって、その社会において人々がど

うスポーツを受け取っていたかということ、もっときちんと文学作品を読み込めば、そういったところまで到達できるのだ、もっとやったほうが良いと言っていましたね。

戦後のイギリス、イングランドのナショナルチームがハンガリーに負けた歴史的な試合があるじゃないですか。1951年でしたかね。ホームでも負けて、ブタペストでも7対1かなんかで負けて。外国のチームにイングランドがホームで負けたとはどうも初めてらしいんですね。たしか、その前の年、南米で行われたワールドカップでアメリカに1対0で負けているんですね。それは海外で食べ物が悪かったんだらうとか、コンディションが悪かったんだらうとか、イギリスでは1対0の電信が届いたときに、何かの間違いだらうと、11対1で勝ったんだとか勝手に解釈して報道した新聞があるくらいだと言われていますが、そのときは負けたとわかったときにもあまり問題にはならなかったようです。しかし、ウェンブレーで負けたときは問題になって、ブダペストに行っても負けたので、これはいよいよイングランドも衰退したという議論がされたときがあったんですね。

ジェフリー・ヒル先生は、当時の新聞でどういう形でイングランドは議論されて、ハンガリーのブダペストのチームはどういう風に報道されて、と報道の言語分析をしているんです。試合の前と終わったあとの両方を追っかけてみます。ジェフは、“mastery”と“modernization”の2つの範疇に分別可能な用語で報道されているという。それはどういうことかということ、「マスタリー」とは「知り尽くしている」ということだと思んですけども、イングランドは何もかも支配できるような技術をもっていて、それで臨むんだと報道されている。それが、試合に負けてみた後になると、「モダナイゼーション」しないといけないという議論が出てくるという。つまり、もっと世界では違うタイプのフットボールが行なわれていて現代化しないといけない、フットボールの近代化をもっとはからないといけないという議論が出ている。ヒル

先生は、要するに、そういう新聞の言語分析をしてみると、その2つの範疇が組みになって、歴史はぐるぐるまわっていくというんですね。マスタリーがあって、それが失敗した後にはモダナイゼーションがあって、イングランドは再生して新たなマスタリーを誇示するという、そういう物語の流れで報道されていて、それはイギリス戦後社会におけるナショナル・アイデンティティと関わっていくという話がされていくんですね。

そのときに僕が思ったのは、ヒル先生のその研究は、その当時の報道の言葉の分析だけなんです。それはその限りでは、そのテキストだけを読めばその通りなんです。もし社会史的な発想をするのであれば違う位置づけができる。戦後のもっと詳しいコンテクストの中に位置づけないと、つまり実際に経済がどのように衰退していて、という風なことともう少しきちっと照らし合わせないと、何でも「負け＝衰退」と位置づけられるという風な話になってしまっていて、それじゃ歴史的な位置づけという点では弱いんじゃないかなという気がするんです。

実は、ちょうどヒル先生がその論文を書いたときに、その年にやはりセンターのスタッフでディルウィン・ポーターという人がいて、イギリス衰退とスポーツというまったく別の論文を書いているんですね。ディルは、国際政治史も専門としていますが、66年のワールドカップでのイングランドの優勝までの再生の物語まで含めて、長期のスパンで、国際政治史におけるイギリスの地位変容ときちんと照らし合わせながら、1951年のイングランド敗北の問題を扱っているんです。すると、ヒル論文のようなドラマチックな文化史的解釈とは違う社会史的な位置づけがなされるようになります。僕にいわせれば、ディルは「古典的」な社会史の問いかけをスポーツを通してしている。ジェフの論文は面白いんだけど、やっぱり1951年の数ヶ月の新聞報道の解釈という舞台テキストの狭さから出ていないような気がして、広いコンテクストへの目配りが足りないんじゃないかなと

いう風に自分では思うんですね。

中澤篤史：どうやら歴史学のメインストリームからみるとスポーツ史はだめだということだと思のですが、そうすると、何故だめなのか、これからどういう展望なり、方法なりが必要になってくるかについては、トニー・コリンズを参照していたのですが、やっぱり幅広い歴史に対して何か光を当てる意識でスポーツを扱うというお考えなのか、その辺はいかがでしょうか。

市橋：本当に僕なんかは図々しいというか、自分でちゃんとやっていないのに申し上げているんですけれども、今、中澤先生におっしゃっていただいたように漠然とした感じなんです、僕のほうは。やはり広い、政治史や経済史とかの動向に言及せずに、たとえば 51 年でもいいんですが、その事件を論じるときに、その背景に言及せずに論じることは面白くないんじゃないかなということなんです。

こういつてしまうと実も蓋もないんですが、誰かが歴史というのは悪い歴史と良い歴史しかないと、つまりよく書かれている、読んでみて面白い歴史か、そうでないかというような。“well written”か、“badly written”かという話を半分冗談でするんですが、結局、そういうところがあるんですよ。いろいろな取り上げ方があって、それは何か成果として出てきたものを読んでみないとわからないことがあるんです。

中澤：もう少しこだわって質問したいのですが、僕はスポーツ社会学や体育社会学の研究を読んできて、最近ではスポーツ史、体育史にも興味をもって読むようになったのですが、ソシオロジーの方は全然駄目だと、ヒストリーのほうはすごいなと感じたんですね、率直に。それを坂上先生などにはそんなことは全然ないと言われたんですが、その確かに好事家の歴史にすぎないような感じはあると思うんですが、事実としてはかなりの蓄積がされてきていると。一方で、ソシオロジーの方はでかい話をしようとしすぎて、結局、知見としての積み重ね方が丁寧になされていたのか、という

ことが、僕が学ぶときにすごく大変だったんです。そうするとやはり大きな話を僕もしたいのですが、やっぱり今度はスポーツそのものを大切にしながら大きな話をというのにつながると思うんですが。

市橋：おっしゃるとおりで、僕も社会学と歴史については同じことを思っていて、スポーツ史、歴史学に関しては、30 年間すごい蓄積があると思うんですね。ジェイムズ・ウォルヴィンがフットボールのことを書いたりしている。ジェイムズ自身は奴隷貿易のことをやったり、スポーツ史をやったり、結構、幅の広いことをやっている高齢の研究者ですね。その彼が、最初にスポーツ史、レジャー史研究が始まった頃にスポーツ史の学術専門誌を作るときに自分は反対だったといっているんですね。スポーツ史家をつくってもしょうがないと。スポーツを取り上げてもいいけれども、*Past and Present* や *Journal of History* など、既存の歴史なり社会史なりの雑誌に発表するべきだ。スポーツ史の雑誌に発表するというのは、形を変えた好事家に過ぎないと、1970 年代にそういうことをどこかに書いています。

トニー・コリンズやマイク・ハギンズなんかは、スポーツ史学会の集会に出ていて、みんなスポーツ好きの人たちばかりで居心地がいいんだけど何か議論したという感じがしない。何かチャレンジングな議論をしたという感じがしないと。そういうこともあるみたいなんです。もっと違うアプローチをしたいというか。

青沼裕之：率直な質問というよりは、刺激的な報告だったので、こちらも考えていることを何か言いたくなります(笑)。大学院のときのスポーツ史の中に閉じこもっている研究は駄目だというのが出発地点で、それからずっと考えながらきているんですが、今も答えが出ていません。後発のスポーツ研究者、スポーツ社会学やスポーツ史研究者は、はっきり言ってレベルが低い。それは例えば歴史学の中でどういう風な位置づけになるのか、もっというと歴史学でいうと史料読みの水準とかね、問題関心の水準や、叙述の水準とか、どこま

でそういう風にしていったらいいか、ものすごく不安を感じてずっと勉強していたと思います。だから市橋さんの言うように、スポーツ史に閉じた研究は駄目だというのはたぶん皆さん思っていると思います。ただ、僕は体育の教員をやっている大学でスポーツ史を教えることなんてまずないんです。そういうニーズを学生がもっているわけではないので。一方で、スポーツの研究に携わっているものからすると、スポーツを日本に普及させていくことに責任を持たなければならない、というところにだんだんポジションが移ってくる。研究していればいいのではない。そうすると、現場の問題もかかわってくるから、それにどう応えるかということになってくる。ですから、僕はイギリスの研究をしているからイギリス史の中にスポーツを位置づけるということだけじゃなくて、たとえば今イギリスではロンドン・オリンピックに向けてお金が投下され費用対効果が求められる形でメダルを取れないようなところは補助金をカットされる。そういうのがブレア政権の下で進められていた政策となると、スポーツ史の僕らは責任をもって見ていくわけだけでも、現実が政治史や経済、たとえばブレア政権の労働党の政策などを知らないと、スポーツの問題を語れなくなってるんじゃないかと思うんですね。だから研究者はスポーツ史で閉じて研究するのではなく、もうちょっと広い視野で見ていかななくてはならないというのではなくて、最近感じるのは、現実のスポーツを研究するためにも国家政策を理解して、その中にスポーツ政策をどう位置づけるのか読み取らない限りは全然話にならない。スポーツくじからトップスポーツのところに流れ込んで、それで地域スポーツのところにめぐっていると言うんだけど、なぜその政権が金を流すのか。それは必ず利害関係があるわけで、そういうところを追求しないようなスポーツ史、社会学、政策研究は意味がない。そういう風に考えた場合は、研究者どうこうよりは、現実がそういうところに求めているから、そこに解を求めていかないような研究は、

やはり市橋さんが言うように面白くない研究になるんじゃないかと思うんです。最近は大分大学にも日本の若い研究者が現地で研究をするようになったからすごく水準は高いんだけど、日本でも国立スポーツ科学センターで紀要に山本あゆみさんという若い女性の研究者がイギリスの国家スポーツ政策について論じていたんだけど、なぜそこに金が流されてどういう意図をもとにいったのかその辺の分析がなされていなくてちょっと残念でした。ものすごく克明な研究で勉強になったんだけど、やっぱり現実が衰えているというか、そういうことをもっとスポーツ研究者、政治学者とか関係なくならなければいけないんじゃないか。そういう意味では僕らは外に出て切磋琢磨しなければならないということをして市橋さんのご報告を聞いていて思ったんです。だから言語論的展開というよりも、我々はどう現実味を帯びるかというリアリティが浴うかなという感じをうけました。

市橋：今のご発言をうかがってひとつ思い出すことがあるんですけど、ド・モントフォートにいたときに、オリンピック・レガシーをテーマにしたシンポジウムがあって、そのときにオリンピック委員会の偉い人が来て基調報告みたいなものをして、「オリンピックは今オリンピックをやるだけじゃなくて、オリンピックが街になにを残すかということが重要になってきていて、今度のロンドン・オリンピックでもこういうことをやっていて素晴らしい」という話をされたんですね。そのときフロアにいたマイク・クローニンが、あとでそれをこてんぱんにするような報告をしました(笑)。まあいろんなタイプの人が出たんですけども、とにかくそこには緊張関係がありましたね。

石井昌幸：翌日の授業でも、マイク・ローニンはその人のことに言及して、「彼のことをブルドーザーと呼びたい。すべてをなぎ倒して更地にしてしまおうパワーだけは認めるけれども」、と言ってすごく怒っていましたね(笑)。

青沼：ちょっとそれに関連してよろしいですかね。

昔からギデンズと一緒に研究している女性の研究者、渡辺さんが日本における第三の道という本を出されているんですね。そういうように、研究者がものすごく政治臭くなってきているというのがあるのかもしれない。政策に関与してきているという。それはスポーツ界でもそうです。今日本ですすめられているスポーツ政策に関与している。そういう意味では、今は、研究者は研究者というのではなくて生臭いところにもかかわってきている。そうになると、いろいろとイデオロギッシュな発言が出てくるんだけど、それをどう読み解くかというのは研究者そのものに必要かもしれないと思いました。

尾崎：昔から、現実のものをみるとき、歴史観や歴史研究がバックボーンにない限りちゃんと見えてこないと言われますが、青沼さんが言われたのは、逆に歴史研究をするにあたって現実をどういう風に意識するのかということになるのでしょうか。それらを引き取ってまとめてもあまり意味はないでしょうが、歴史と現実をどういう風にバランスをとって研究するのかという問題だと感じました。

鈴木直文：僕も似た問題意識でやってきていて、いろいろひっかかるところはあったんですけども、一番響いたのは「ハーリングムで行われるポロ競技とハルで行われるレスリングとの共通性はあるのか」というところです。僕は、何も考えずにいうと、スポーツはアートのカテゴリに入るんです。イギリスのアートとスポーツをいっしょに含めるところが好きなんですけれども、それによって完全に見えなくなってしまうものがあって、だからスポーツ史という雑誌をつくったりスポーツ社会学という学会をつくったりする。その悪いところがあると思うんですけども、比較の視点というのが固定されてしまう。そこはつまらないとしているので、だからハーリングムのポロ競技というのが本当に比較できる対象は全然違う次元なのかもしれないという可能性がある、というまったくの感想でしかないのですが。それから、私は都市史とスポーツというのが興味のある部分

なんですけど、もっと都市の文化的な部分にスポーツはリアルにひっついてるように思うんですけども、都市史の中でのスポーツの存在が大きいのではなく、都市におけるスポーツ史になっているのがイギリスでもあるのが意外だなと思うところなんです。

市橋：そうですね、マーティン・ドントンは経済史も何でもやる人なんですけれども、彼が編集したケンブリッジの都市史シリーズの三巻本の第3巻なんですけど、そこでももうちょっと真正面から扱われてもいいんじゃないかと思うんです。マシュー・テイラーがスポーツを通した都市史研究をやっていくようなので、今後、成果が出てくるんじゃないかなと思うんですが。イギリスの場合はそうですね、単純に施設の話ですと、ロンドンのハックニーの沼地を埋め立ててスポーツの場所を作ったというのは、都市におけるレクリエーション、野外運動の必要に応じていくというのがあったんだと思うんですね。

レジャーというと、生産以外の何でも入ってくるじゃないですか。でも、主要なレジャー活動をみんなひとつにくくってみても、何も見えてこない。だから、同じように、意味が出るようなくくり方とか、意味がつかめる対象とかを、スポーツとスポーツを比較すれば何か意味が出るんじゃないかと、たぶんスポーツと別の何かを比較したほうが、あるコミュニティの中でのスポーツの意味と同時に、そしてコミュニティの意味もみることができるよう研究の仕方もあるんじゃないかと思うんですね。この場合も、ポロとレスリングをやる階級は違うわけなので、別の比較をしたほうがポロの性格も出るし、逆にハルのほうだったら地域社会や労働者階級の動きと比較したほうが、何かやはり面白い論文が書けるということだと思うんですね。

中澤：ポロとレスリングの皮肉は、スポーツ史と伝統との皮肉にもなるんだと理解するんです。丁寧に読むと、スポーツをひとまとめにするなど。ポロはポロでやって、レスリングはレスリングで

やって、というさらなる限定化をする受け取り方もありそうなんです。そうすると歴史の場合は、全体史と個別史という空間スケールをどう調整するのかというお話につながってくると思うんですね。

市橋：そうですね、そこをどう設定するのかということが問われるんだと思うんですね。

岡本純也：スポーツ史家が抱える問題は例えば音楽史家、劇場とか演劇の歴史だとかいうそれぞれの分野の歴史家が抱えているものがあるのか、もしそれぞれの分野でそのような悩みを抱えている方が多いということであれば、そういう研究者同士が組織化して検討していくというのは可能なのでしょうか。

市橋：他の分野でも同じような課題があると思うんですね。演劇にしる、演劇の上演史をコツコツやっている方もいて、それはそれで意味がもちろんあるんですけども。幅広い社会との関係の中にそれを置いてみるとどうなるのかということとはなかなかされていないというのはあると思うんですね。だから形としては、尾崎先生のご専門の戦後復興期におけるスポーツとか、鈴木先生の言われたアーツとかというものと比較するというのはひとつできるのかなと思うんですね。

小澤考人：スポーツ史かスポーツ・スタジアムというお話をされたと思うんですが、スポーツ・体育は社会学系が入ってくると、社会学というわかりかし現代性を解いていくというものが学としての視点としてあると思うんです。そのときに、スポーツ史とおっしゃったときの範囲ですね。戦後 1960 年代頃までは入ってくるのか、あるいは青沼先生のご指摘もあるんですが、現在のスポーツは政治や経済が必然的に入るんだとおっしゃるときには、例えば、それは現代資本主義やグローバル化の動向であるとか、社会学の分野だと前近代と後期近代、それに対する現代社会であるとかの視点があると思うんですが。

市橋：スポーツ史もトニー・メイソンとリチャード・ホルト先生 2 人で書かれた戦後イギリス・ス

ポーツ史という本があるんですが、それは 1945 年からたぶん 2000 年となっていて、その本でアマチュアリズムとかプロフェッショナリズムとかテーマ別に章が分かれていますけれども、ひとつのポイントは 1990 年代にスポーツは大きく変わったということです。それは、サッカーの放映権などのマネジメントの仕方の変化ですね。他の分野でも多かれ少なかれあると思うんですけども、サッカーは特に変化が大きく、クリケットなんかもそれに引きずられている。だから、僕が思うには、確かに現代に近くなればなるほど社会的な社会学の研究対象といえるし、古ければ古いほど歴史の対象といえると思うんですけども、時代の違いというより方法論の違いという気がするんですね。歴史は歴史の史料に基づいて変化と連続を図る、何が違って何が変わっていないのかというのが中心で、社会学は明らかにしたいことが違うかな、その辺じゃないかなと思うんですね。スポーツ・スタジアムというのは欲張りかもしれないですけども、それを両方ひっくり返して見ていくというんですかね。カルチュラル・スタジアムと同じというか、だからカルチュラル・スタジアムと言っていいと思うんですけども。

坂上：スポーツ・スタジアムの動きはわりと社会科学、人文科学が中心なのかな。

市橋：アラン・トムリンソンが中心に辞書もつくったみたいです。カルチュラル・スタジアム系といったら変だけでも、歴史家というよりは、という感じですよ。

坂上：単純にスポーツ・スタジアムというものを我々が聞くと、もっと自然科学系もふくむという想像してしまうんですが。

市橋：一応、生理科学なんかもあるんだといっているけれども、実際にやっているのは人文系のように見えますが…。

坂上：僕もスポーツ史とは何かというのでずっと悩んできていて、この間のスポーツ史学会でもそのような話をしました。スポーツ史は二重の課題

を背負っていて、まず、歴史学の一部としてのスポーツ史という当たり前の話と、もうひとつはスポーツ科学の一部であるということ（それは体育学といわれたりするんだけど）。そういう二重の課題を背負っているというか、背負いたくて背負っているのではないけれども、我々の立場は二つの課題を掲げなくてはならなくて、スポーツ史を研究することによって一般史に跳ね返していく。経済、あるいは政治史では見えない部分をスポーツだからクリアに描きだしているということ、そういうものと同時にスポーツ科学というのはスポーツ史を研究してスポーツとは何かという、単純にいうと、そこに帰っていくひとつの何かルートがあって、そういうものを同時に持っている。これは教育史の人たちも結構苦労していて、教育史をみんなやるようになって、じゃあ教育史って何なのといわれるようになって、そこでの議論はさっき僕が言ったような答えになるのかなと。いちばんいやらしい研究者は、なんていうのかな、歴史学に対してはお前たちはスポーツをよく知らないからといって、スポーツ科学に対しては歴史学を知らないアホだなと（笑）。いやらしいよね。

それに関連するというか、レジャー史の最初のところでいわれた、レジャーとは何か、そのはっきりしなかったというのはレジャーの範囲なのかな。

市橋：はい、範囲もそうですし、それが人間にどういう意味があるのかなということですね。それは、今もはっきりしないですね。だから、その問題は措いておいて、社会をみるためのひとつの素材というか、そういう風にやっつけていけばいいのかなということですね。ピーター・ベイリーというミュージック・ホールの研究をしている大家が、一度、ド・モントフォートに来て、彼が「レジャー史の今後」みたいな長い論文をしばらく前に書いていますが、彼なんかはそういう問題にアプローチすべきだ、言論的展開なんかもすごく大事だといっていて、人々の経験がミュージック・ホールに行って具体的にどういう経験をしたのかと

いうのを歴史家は実際に言わないといけないというか、そこを追求すべきだということをいっていたんですね。それは、まさに音楽を聴くとは何かとか、そのときのエモーショナル・エコノミー、最近のマーケティングの用語でいうと、「エクスペリアンス・エコノミー」みたいな、ライブに行つて、そのときの経験というのがどういう意味をもつのかということアプローチできる歴史の方法を考えなきゃいけないと、今後の課題としていっていたんですね。確かに「エクスペリアンス・エコノミー」は現代のイギリスの音楽マーケットでは重要だとどうやら言われているらしいのですが、それはどういうことかということ今音楽産業は、CDの売り上げよりもライブの売り上げのほうが中心なんですね。CDとかの売り上げはダウンロードができるような環境ができた中でお金にならなくなってきていて、ほとんど販促用、無料プロモーション用になりつつあるらしいんですね。それで、お金になるのはライブとかグッズを売るという形になってきている。そういうことを考えると、ではなぜ人はライブに来るのか、一体何しに来ているのかということはどういう風にいえるのか、そういうことを歴史に当てはめるとピーター・ベイリーみたいなイメージの歴史の研究になるのかなと。でもどういう風にやるのかな？というのもあるんですけども。ピーター・ベイリーみたいに、ミュージック・ホールの歌詞とかいろんなテキスト、文学作品なんかも読み込んでいくのかなあと。ピーター・ベイリーはお会いしたけれどもいいおじいさんで、読むものはすごく理屈っぽいところがあってどんな嫌な人かなと思ったんですが、もともと彼はピアノを演奏する人で今も飲み屋なんかで弾いているみたいです。

坂なつこ：スポーツ史は専門でないので教えていただきたいんですが、アナルがでてきて心象史とか、そういう風なものは英国、イギリスではどうなのかというのが一点。それから、アイルランドのスポーツ研究をしていると、アイルランドでは、英国、イングランドはどれだけ悪さをしてき

たかみたいなのがあちこちであるんですが、シラバスなんかをみると、まったくそういうところがない。つまり、戦間期とか 19 世紀後半、ナショナル運動で英国スポーツとか外国スポーツがいろいろな形でされるんですけども、いかに普及したのかというのが一項目で置かれているし、ヨーロッパに目を向けているのはあるんですけども、エンパイヤーというかそういうところの視点は、どうなんですか。

市橋：ご質問の中のアナールの影響はあまりないんじゃないかなとか、ピーター・ベイリーは身体感覚の歴史につながるの、そういうところはあるんですけども、彼自身はイギリスではなくてカナダで研究していて今はアメリカにいるらしくて、やっぱりイギリスは、イギリスの伝統的
社会史の中から抜けきれないとか。これはどうなんですかね。

石井：最近翻訳された『身体の歴史』という三巻本とかが非常にフランスっぽいとか、あれはリチャード・ホルトも書いているんですけども。あれもかなり気を使ってスポーツの経済とかイギリスっぽい書き方をしていない印象を受けました。イギリスは逆に授業ではそういう話はよくでてきたんですけども、フランスやドイツを対象にしながら自己規定しているところがあって、そういうことを明示的にいったりしますよね。ドイツは軍隊的な体操をしていたけど、イギリスはそうではなくという。結構研究でも今日お話があったように、スポーツ史研究というのが出てきたのがフランスとかなり違うので、やはり社会史ベースの人が多いため身体史とかそういう方向に行きたがらない人が多いですね。

市橋：ホルト先生なんかはもともとフランスのスポーツをやっていたのでわりとオープンなほうですよね。

石井：そうですね。だからホルト先生はわりと仲介者的な役割になっている人という印象を受けましたね。フランスやドイツの人、クリスチナ・リネルブといいましたかね、もともとドイツの体育

史の草分け的な女性の研究者のことをホルト先生は尊敬していて、ホルト先生がスポーツ史をする大きな理由のひとつは、若い頃に、その体育史家の女性の研究者の論文を読んだときに、歴史学にこういったものを対象にできるんだと気づかされたといつて、イギリスのスポーツ史学会にも基調講演としてよんで話を聞くということをやっていました。

市橋：2 つめの質問も石井先生にお話いただきたいのですが (笑)。北アイルランド、アイルランドの問題があんまりないともないという。

石井：クローニンはもともとセンターで働いていた時期があって、GAA の話は必ず入ってくるんですが、どれくらいその深刻な問題として捉えているのかですね。もう一方で感じたのは、自分たちでないし、自分たちが直接かかわったかつての植民地だとか、アメリカなど、それ以外に対する真剣な興味はほとんどないんだなと思いました。話として聞かせてくれるのであれば、ああそうなんだ、という感じです。それを共有できる議論として一緒にとりかかるといえるのは、ホルト先生はかなりあるほうですが、他の人はほとんど興味ないんじゃないかなという印象を受けました。

坂：宗主国と植民地との関係だとか、日本と韓国とかいろいろ思い浮かびますね。あと一点は、歴史研究をされている学生のとときとかは、歴史研究というのは史料がとにかく大事だという話で史料がなければとにかく何もいっちゃいけないんだというような非常にストイックとか、そういう意味でアナールとか研究とか心象史とかの研究はすごく難しいけれども、がんばってみたい風なところがありました。先ほどの青沼先生のお話を聞いていると、その歴史研究自体が変わってきているのか、それとも現代的な意識を持っている人が変わっているのか。スポーツ研究ではスポーツ社会学もそうですが、やっているとどうしても経済とか政治とか切り離せないと思うんだけど、その逆は中々ないというのは、歴史のほうはそういう意味ではスポーツとかアーツとかいうの

は残らないですよ、パフォーマンスとか、そういう意味ではやりにくいとか、やれないとか、やっちゃいけないというようなそういう風な感じはイギリスではどうなんでしょうか。

市橋：やはりイギリスも史料がないと書けないということで、おっしゃったようにパフォーマンスというのはなかなか歴史研究の対象にならないことは確かだと思いますね。だからトニー・メイソンがフットボールの研究を始めたときは、こういう史料がこういうふうに使えるのかという、そういう驚きがまずあったと思うんですね。クラブの帳簿とか使ってこういうことができるというような。

尾崎：史資料の掘り起こしと研究という点では、一橋の歴史学の安丸良夫さんの著作『方法としての思想史』の中に、歴史研究者がその蓄積した方法論をバックに自治体史の編さんに従事する時期があったけれど、役職の権限によってなかなか得られない地域の個別の史資料の掘り起こしをして、それらを活用した研究上の進展云々、という叙述があります。また、私のフィールドであるオーストラリアのスポーツ研究でも、個々のクラブの歴史をまとめるところを盛んにやっている感じで、そこでやはりイギリスのスポーツ史の研究を学んでいるんだろうなと感じますね。

坂上：スポーツ史研究の現状や動向をどうみているのかということですが、トニー・コリンズにしても、このままじゃいかんという意識が強いんですが、リチャード・ホルトはどうなんですか。

市橋：トニー・コリンズも、マイク・ハギンズも仲間にもっとやろうよと呼びかけているところがあるので、ペシミスティックというのは違うのかもしれないんですけども、もっとできるはずなのにと思っているはずなんですね。スポーツ史はもっと面白いはずで、もっといえるはずなのになんでこんなに認知されていないのか、それは自分たちの力がないところがあるんじゃないか、という感じなんじゃないかと思うんですね。ホルト先生なんかは元気ですよ。

石井：そうですね、トニー・メイソン先生と好対照のタイプで、ホルト先生は良きジェネラリストとか、全体の要点を抑えて時代像を描く歴史家だと思うんですけども。ただ個人的にショックだったのは、大学の社会的な要請もあって 20 世紀の研究をしなくてはならなくなっていて、自分は本当は 19 世紀のことをやりたいとあって、最初に行ったときに何に興味があるのかということで 19 世紀におけるスポーツの近代化といたら、それは俺がやりたいんだと言われて（笑）、でもできないんだよねと言われました。20 世紀のことは行きがかり上やっているんだけど、引退したら 19 世紀をやりたいとっていました。あとひとつ、今回スポーツ史ということだったんですが、イギリスのスポーツ史はだいたいフットボールとラグビーとクリケットで、あと付け足的に競馬とボクシングだけでそれ以外はないですね。この間も学会で、秋元さんがホッケーの歴史をやっていて、イギリスではホッケーの歴史をやっている人はいないのでごく貴重だなと思ったんですが、全体像を思考している方って意外と少ないんですね。スポーツ史といいながら大半はむしろ俺は監督をやるとか、トレーニングをやるとか、すごく細分化しています。そういう意味では日本のほうがむしろトータルに考えている面もあるのかなと思います。

尾崎：予定の時間も過ぎましたが、市橋先生最後に何かございましたらお願いします。

市橋：長い時間ありがとうございました。僕の方がいろいろと勉強になりました。